

動物

の

診察室

から

○ 32 ○

7月の月曜日、12歳のゴールデンが来院しました。3カ月前から具合が悪く、以前は25kgあった体重が17kgで、自分で立つこともできません。エックス線検査の結果、脾臓に腫瘍があり、重度の貧血が見られました。脾臓の腫瘍は腫瘍と見られました。脾臓に腫瘍があると自分の赤血球を壊してしまう抗体が体の

中にできて、貧血を起こしてきます。

治療としては、体の中にできた抗体を薬で抑えるのですが、薬の効果が出てくるには時間がかかります。原因となつて脾臓の腫瘍を早く取り除いてあげることが必要ですが、患者のゴールデンの赤血球の割合は16% (正常は50%) しかあり

ませんでした。最低20%ないと外科的手術は危険があります。普通なら、すぐに輸血をするのですが、自分の赤血球を壊す抗体ができている場合に、輸血の血液も壊してしまふ可能性が高いので

12歳と高齢ですが、飼主さんはできるだけいい処置を希望されました。生命の危険がある状態ではありませんが、昼の治療後、夜は家へ帰ることにしました。

治療は、翌火曜日に輸血する血液が壊れないように免疫グロブリンを点滴します。そしてその翌日、血液型が適合する病

院の大型犬「小梅ちゃん」の血液400ccを輸血して、木曜日に手術です。手術当日、手術はかなりリスクがあること、手術をするなら、輸血の効果があつたこと、手術の結果がある今しかないと、そして、万全の準備をするなら、もう1回輸血をしながらの手術がベストであることなどを検討しました。ただ、手術

「きょうは、献血！」

元気な犬が手術手助け



献血に来た、元気なロッキーちゃん

状況は続きませ

後数日で再度の輸血が必要になることが予想されますが、連続して小梅ちゃんから献血することはできません。

土曜日の朝には、単身赴任のお父さんが面会に来て「久しぶりだね。がんばったね」と話しかけていました。その日は夜まで治療が続いていました

このような時のために病院の患者さんのワンちゃんの数匹は、血液型を事前に調べてあり、緊急に血液が必要になった場合には、献血をお願いいたします。そのうちの1匹、ラブラドルのロッキーちゃんも血液型の登録があり、連絡をするとすぐ

家族全員に見守られ天国へ行ったのでした。できるだけのことをしても助けることのできない命、獣医師として心が悲しくなる時です。

草村 正人 (獣医師・新潟市)

＝毎月第2・4木曜掲載＝